

76	LIVE	新藤 理	2005.12.28
77	二宮金次郎の精神と北海道	山城 俊昭	2006.1.12
78	「福祉除雪」	畑中紀世彦	2006.01.13
79	不登校は早いうちに	亀貝一義	2006.01.23
80	舞台	芳賀 慈	2006.01.31
81	卒業生の担任	杉野建史	2006.02.01
82	不定期通信	新藤 理	2006.02.04
83	「アンパンマンのマーチ」に学ぶ	金澤拓紀	2006.02.09
84	演劇公演間近！	畑中紀世彦	2006.02.09
85	舞台 2	芳賀 慈	2006.02.10
86	多国籍人生相談	田房絢子	2006.02.16
87	『担任(その1)』	杉野建史	2006.02.24
88	いろいろな形の勉強がある	亀貝一義	2006.02.28
89	卒業式が終わって	亀貝一義	2006.03.06
90	坊主頭	芳賀 慈	2006.03.09

76 LIVE 新藤 理 2005.12.28

そう言えば、何年か前にはこんなタイトルの、吹奏楽部を舞台にしたドラマが流行ったっけ。

ロックのコンサートを「ライブ(LIVE)」と呼ぶようになったのはいつの頃からか。LIVEとは、「生演奏・生放送」のこと。「生の演奏会」は、英語に直すと「live concert」となるらしい。

創部以来、初めてのコンサートとなる「プラスアンサンブル部・クリスマス・ミニミニコンサート」が昨日終わった。楽しむことが何より大切、というスタンスで続けてきたこの部でも、本番前にはさすがにちょっと厳しく指導を入れたりした。でも、後から部員に「それが楽しかった、音楽が出来上がっていくのが嬉しくて、合奏しながらニヤニヤしちゃった」とも言われた。

当日の朝、部員たちはみんな緊張していた。「そんなことないよ」と言い張る部員もいるだろう。でも、自覚はなくても、体や心の調子が何だか違ってはず。表情から、言葉から、リハーサルの音色から、すべて伝わっていた。いや、緊張だけではない。本当はみんなワクワクしていた。楽屋(木工室)で「もうダメ～！ね、今日もう本番やめよ!？」なんて言いながら、みんなとおそろいの手作り衣装に包まれた背中、ちゃんと誇らしさを放っていた。

初めての本番。楽しかった。部員たちの緊張も、喜びも、「よし、うまくいった！」という瞬間から、「あ、ちょっと失敗！」という眉間のシワまで、すべてが届いてきた。そうそう、これだ。これが生演奏の楽しさなのだ。みんな、なかなか分かってるじゃないか 誰かと同じように、僕

もいつしか顔がほころんできた。

音楽とは、瞬間の芸術だ。どんなに録音技術が発達したって、放たれた一瞬の音をそっくりそのまま甦らせることはできないし、ましてやり直しなどきかない。だから、プロの音楽家は長い曲の中のたった一拍の音でも、生活をかけてそれを鳴らしている。そこには崖っぷちのスリルとともに、「一期一音」とでも言うべきはかない魅力が存在している。

何もプロに限った話ではない。昨日のコンサートは、「ミニミニ」ではあってもれっきとした生演奏。初めての観客席を眼前に、一度きりしかできない「お客様とともに楽しむ」ことに彼らはチャレンジした。難しいもので、どんなに上手に演奏してもそれができない楽団だっていっぱいあるのだ。昨日の部員たちには、まあ、合格点をあげていい。

「L I V E」のもう一つの意味は、「生きている」ということ。知ってか知らずか、ブル部の部員たちは、音楽を通じて音楽以外のものをたくさん放ってくれた。それは緊張であり、喜びであり、眉間のシワであり...いや、そんな一つ一つを挙げるのでは追いつかない。垣間見えるのは、彼らのすべてだと思う。彼らが「生きている」ということ、そのものだと思う。

77 二宮金次郎の精神と北海道

山城 俊昭

2006.1.12

私が敬愛する内村鑑三が、5人の代表的日本人の一人として挙げている人に二宮金次郎がいます。金次郎には、亡くなる前年に孫の尊親（1855 - 1922）が生まれました。尊親は42歳の時1897年（明治30年）「興復社」という会社組織を作って北海道豊頃町（現在の二宮地区）に入植（14戸、総勢50人が福島県から移住）し農場を開いたのです。尊親は祖父の「すべてを起こすのも心、すべてを失わせるのも心」という教えを守り、「土地の開墾は大切だが、心の開墾はもっと大切だ」と、入植者の間で「芋こじ」という寄り合い（相談会）を開き、農民同士の自由な議論を奨励しました。（札幌自由が丘学園と似ています。）

「芋こじ」とは、泥の付いた芋を洗う時、桶の中で芋同士がぶつかってきれいになるという意味です。そして10年後農場の目処がついた時に、福島県相馬市に戻りました。ですから、北海道は、金次郎が遺した遺物（レガシー）によって、しかもそのお孫さんが蒔いた種によって大きな恩恵を蒙っているのです。

背に薪を背負って歩きながら本を読む姿に、金次郎は村人たちから「キ印の金次郎」というあだ名を付けたられた（いじめ？）そうです。また仕事に熱中して家庭を顧みず、奥さんに愛想をつかされて結婚後2年で離婚、といった話を知るととても身近に感じませんか。今年は丁度金次郎没後150年になります。

78 「福祉除雪」

畑中紀世彦

2006.01.13

私には冬限定の日課がある。朝、目が覚めるとまずカーテンを開ける。そして窓の外の雪を眺め、10cm以上雪が積もったのか確認する作業だ。家から見分けがつかないときは、外に出て確認をする。この冬は週末に大雪が降ることが多く、生徒が登校しない日でも「よし、除雪に行くぞ。」と判断をすると、生徒2人に電話をする。待ってましたと電話に直ぐ出て「わかった。」と返事をするが、こっちの話もろくに聞かずに電話を切るくん。まだ眠たそうな声で返事をしたあと、自分家周辺の積雪情報をひとしきり説明してくれるくん。そんな生徒2人と私を含めた3人が、

『福祉除雪』のため除雪先のおばさん家に集合するのだ。

『福祉除雪』とは、札幌市の社会福祉協議会が協力員を募り実施している地域のサービスだ。高齢の方や障がいのある方が、通院や買い物などの外出時に支障となる、道路に面した出入口部分と玄関先までの通路部分の雪を協力員が除雪をするもので、我が学園でも地域の支え合いとして、ここ数年参加している。

札幌自由が丘学園は2件のお宅を担当している。1件のお宅は、目が不自由な高齢者宅で家が道路に面してはいるが郵便受けが外にあり、そこに除雪車が道路からかき集めた硬い雪を盛ってしまうのでその雪を崩して捨てるのと、屋根から落ちて玄関を塞いでしまった雪を除雪する。もう1件は、娘さんが車椅子の高齢者のおばさん宅で、玄関から道路までの道が離れていて20mくらいあり車椅子が通れるように除雪をするのと、裏の物置までの道を確保する。

この『福祉除雪』を始めた頃の生徒達は、やれこのスコップは使いづらいから変えてくれと言ったり、大雪のときは昼過ぎまでかかるため「お腹空いたなあ。」とか「もう、雪降らないで欲しい。」とぼやいてみたり、せっかく前回積み上げた雪の山を気がついたら崩しているなど、3人でやってはいるものの「1人でやった方が要領良くできるな。」と内心思いながら除雪の仕方を教えていた。

そんな だが、言われたことを確実にこなす と、やり方を覚えると率先して取り組み、四苦八苦しながらも自分なりのやり方を工夫する のコンビは、除雪の仕方や排雪する場所の判断など上達してきている。なかなかの戦力となってきた。おばさんたちは生徒達がくるのを楽しみにしてくれていて、除雪が終わるとみかん、ジュース、パンなどをくれる。そんな優しいおばさん達との対応もしっかりしてきた。除雪をしなければ外出できないおばさん達のために除雪をする、その自分の役割に対する責任感も芽生えてきた...かなあ？いろいろな面で以前よりも少したくましく成長してくれたことは確かだ。とはいえ、2人だけで行かせるにはまだまだ不安な要素はたくさんある。高くなった雪山の上にはかいた雪をはね上げられないし、硬い雪を削ったり、ダンプで排雪する力も頼りない。でも、そのうち生徒達だけに任せられるようになってもらいたい。

コンビがそうなったときを想像しながら3人で除雪をしているとワクワクする。

そしてこう思う、「 よ、今あなた達は『福祉除雪』で立派に社会に貢献しているのだ。」

札幌自由が丘学園の「福祉除雪」は3年目です。

79 不登校は早いうちに 亀貝一義 2006.01.23

昨日(21日)「星様セミナー」があり参加した。わが学園の文科省委託事業にご協力をいただいている田中敦さんも問題提起した。非常に興味深かった点を記しておきたい。

このセミナーのテーマは「踏み出せない現在(いま)を考える」であったが、田中さんはたくさんいる「引きこもり」の人たちで、「不登校から引きこもりへの移行継続者は10%未満」だと言っていた。聞き間違いならまずいと思ったのでメールで確認した。

実は、今1年間の委託事業の総括を進めている。わが学園の250人超の卒業生たちすべてを追跡することはできないが、けっこう多くの卒業生たちの状況では、「引きこもり」の人はいない。だから、私も小中高校段階での不登校はむしろ「引きこもり」という状況にはならないのではないか、とっていたが、今回のセミナーでの田中さんのお話を聞いて意を強くした。

もちろん、ここでいう「不登校」の子どもは、フリースクール等に通っている人をさすと考えて欲しい。ただ若いうちの不登校は誰もが「引きこもり」にはならない、とまでいうデータは私にはない。

考えてみればウチの娘（30数年前）も「保育園不登園」を何か月も続けて、学校にも行かない、等と言ったら大変だと思っていたが、そういうことはなかった。

長い人生いろいろある。不登校に類することは、小中高校段階で経験した方がむしろその後の人生では良い、といえるのではないだろうか。

そのセミナーである高校の教頭さんの話もあったが、これについては別のところでコメントしているので、興味のある人は見て欲しい。

80 舞台 芳賀 慈 2006.01.31

今活動しているかどうか分かりませんが、新感線という劇団がありました。それを主宰していた古田新太（ドラマで見かけます）に誘われて羽野晶紀が劇団入りしたのは学生のときだったそうです。大学の先輩後輩の関係だったと記憶しています。

明るく元気な彼女はみるみる劇団の看板女優になり、テレビでも良く見かけるようになりました。画面の中では「今ドキの女の子」で、受け答えもちゃらんぼらん印象でした。何でも笑って済ませる「可愛いだけ」の女優という風に見えていました。

それが、根底から覆されたのが彼女の舞台でした。それも新感線の芝居ではなく野田秀樹率いる野田 MAP の舞台です。観客を引き込み、惑わせ、欺く仕立てに、私は夢中になりました。中でも羽野晶紀は抜群に輝いていて、美しく、魅力的でした。

だから和泉元彌と結婚と聞いて驚き、すっかり見かけなくなったことをさびしく思っています。空中元彌チョップもさることながら、彼女ならもっと人を集められるのに、と余計なことを考えます。

今、学園では中学生を中心に休日返上で演劇公演の練習をしています。本番はたった数時間だとしても、どれだけの時間と魂をそこに込めたかは、観ている側にすぐ伝わります。練習を終えてとても良い顔で帰っていく彼らに、心からエールを送っています。

81 卒業生の担任 杉野建史 2006.02.01

卒業生を送り出すと、一応の区切りがつく。自分の心にも区切りをつけ、次に出会う子どもたちとのことに思いを巡らせる。昨年度高等部初の卒業生を送り出した。第一期生の担任ができたことはとても幸せである。

先日、ある父母から電話をいただいた。第一声は「杉野先生は卒業生の担任ですよ。まだ担任ですよ」だった。

自分は限られた時間の中で「何ができるだろうか」「この生徒たちならば、このことをやってみよう」と考える。一定のスパンを考えるときの基準は「年度」である。学業での卒業（毎日登校

し、授業を受け、いろいろなことに挑戦し、卒業に必要な単位を取得する。など)の他に、精神的卒業があるとすればいわゆる「年度」は一定のスパンではなくなる。卒業生とは同じ時間や空間を共有することはできない。しかし、卒業生が本当の意味で一人歩き(経済的精神的自立と言ったりするのであろうか)するときまでは担任でいたいと思う。「担任でいられたらとても幸せなのだ」と思えた。

妙な言い方になるが「時間差の卒業」があっても良いのだろう。卒業は、「卒業だ!」と決めるのは生徒本人でなければならない。学園が送り出すのではなく、生徒が文字通り「巣立つ」のであろう。そのときに、教師の生徒への評価と生徒自身の自分への評価がどれくらい重なるか。教育(共育)の醍醐味がそこにあるのだろう。

8 2 不定期通信 新藤 理 2006.02.04

学校へ行きたくないわけじゃないんだ、と彼女は言う。でも、行こうとするとなんだか急にすごく具合が悪くなるんだよね。行けばそれなりに楽しいんだけどなあ。何だろう、やっぱり学校とか授業とか、そういうのに拒絶反応があるのかなあ...

フリースクールの生徒との会話、ではなく、これはフリースクール卒業生との会話。数年前に卒業した元生徒が、「何か最近ダメなんだよね」と電話をよこしてきた。わりとよく連絡をくれる彼女、いつもなら「この前からこんなこと始めたさあ」と忙しい毎日の様子を聞かせてくれていた。でも、専門学校に通っている今、こんな風に体に症状が出てしまうのは中学に行きたくなかった時以来で...そう話すトーンは、ぽつぽつと低い。電話しようかどうしようか、少し迷ってからかけてきたような気配がある。いつもと変わらないのは、「明日あたり遊びにいい?」の一言。

翌日、放課後の時間にちょっとぎこちない様子でやってきた彼女、それでも顔色は悪くなく、目元にも不安定な様子はない。しっかり食欲もあるというので少し安心して話を聞いていた。

悩みを打ち明けていく中に、気付けば他愛のない話題もいろいろ。懐かしい名前がたくさん出てくる。驚いたのは、「昔より最近の方が卒業生した友だちとよく遊んでるよ」という話。何だかんだで二週間に一回くらいはみんなと顔を合わせているという変化の背景には、「昔はあまり会話が続かなかった男の子なんかとも、最近すごくいろいろ話せる関係になってきたんだよね」と語る嬉しそうな笑顔があった。どんな道に進んでも、この学園での日々が彼女の今とつながり続けている...そう考えると嬉しい。彼女の周りの、ちょっと顔つきの変わった卒業生たちもみな同じつながりを持っていることは、なお嬉しい。

十代の終わりごろ、やけに大人扱いされることが増えて、自分は昔と変わってないのに、急に将来のことを本気で決断しなくてはいけない気がして...わけのわからない焦りに翻弄されて悩むとき、若い時分の生きにくさを誰もが感じてしまうだろう。でも、「何か元気になってきた。ありがとね」と帰っていった彼女には、気が向いたときに成長を見せて、時々甘えて、自分を持って帰るところがある。きっと大丈夫だろう。

8 3 「アンパンマンのマーチ」に学ぶ 金澤拓紀 2006.02.09

今では「アンパンマン」のことを知らない子どもはほとんどいないように思うが、私が初めて「アンパンマン」に出会ったのは、テレビアニメではなく絵本の中の世界であった。「アンパンマン」の歴史を紐解くと、一番初めの「アンパンマン」は現在のようなアンパンの形をした顔ではなく

普通の人間だったそうで、おなかの空いた子どもにアンパンを届けるというストーリーだったらいい。

その5年後(1973年)、私が産まれるよりも1年早く、最初の絵本作品「あんぱんまん」が誕生し(ということは、彼は今32歳!?)、自分の顔をちぎって子どもたちに分け与えるその姿に、当時は編集部の間でも評判が悪かったそうだ。私も初めてその姿を見たときにギョッとしたことを覚えているが、ただ何となく幼心にも自己犠牲の精神のようなものを感じ取っていた気がする。

日本テレビでアニメ化されるようになったのは、絵本誕生から15年後の1988年のことで(その5年ほど前にNHKでもアニメ化の企画があったのだがキャンセルになったらしい)、「メロンパンナ」ちゃんや「ロールパンナ」ちゃんなど、今のように「一体どこまで増え続けるんだ!?!」というほどの膨大なキャラクターは存在していなかった。

前置きと蘊蓄(うんちく)ばかりが長くなったが、アニメ「それいけ!アンパンマン」の主題歌「アンパンマンのマーチ」を耳にしたとき、誰もがそのメロディを口ずさむことができるのではないだろうか。

しかし、歌詞がどういった内容であるかを言える人はそれほど多くはないだろう。私自身も昨年、大学時代の同期がヒョイと家に遊びに来てくれるまで、あまり気に留めずに過ごしてきた一人であるのだが、そのことを指摘されてよくよく歌詞を読んでもみるとなかなかスケールが大きいのである。冒頭(1番)だけ紹介したい。

そうだ 嬉しいんだ 生きる喜び たとえ 胸の傷がいたんでも
何のために生まれて 何をして生きるのか こたえられないなんて そんなのは嫌だ!
今を生きることで 熱い心燃える だから君は行くんだ 微笑んで
そうだ 嬉しいんだ 生きる喜び たとえ 胸の傷がいたんでも
ああ アンパンマン やさしい君は 行け! みんなの夢 守るため

う~ん、深い。深すぎる。2番以降も読んでみるとますますそう思ってしまう。やなせたかしさん(「アンパンマン」の作者でもあり、この歌の作詞者でもある)、これは子どもたちのみならず、全人類へのメッセージなのでありましょうか。卒業生(高等部)への饞(はなむけ)の言葉はやっぱりこれにしようかな~。

8 4 演劇公演間近! 畑中紀世彦 2006.02.09

本番4日前。今日はプラスアンサンブル部と初めての音合わせ、立ち稽古を始めてから役者全員が揃ったのも今日が初めてだった。ようやく出てきた一体感。今まで練習をしてきたおおよそ90分の演劇に金管楽器の生演奏が加わったことで、演劇ゼミ、ブル部の生徒たち共に手応えと本番までの新たな課題を感じ、一層の盛り上がりを見せた。2月12日の演劇公演が間近に迫り、演出からの細かい指摘に今まで以上に真剣に聞き入る生徒たち、この緊張感からいよいよといった雰囲気伝わってくる。

札幌自由が丘学園を略してS J G、このS J Gは我が学園の教育目標でもあり、Step up(ステップアップ)、Join hands(ジョインハンズ)、Good Sense(グッドセンス)だが、今回の演劇公演を迎えるにあたり、生徒たちはこのS J Gの3つ全ての面で成長を見せてくれている。

学園祭での発表のときもそうだったが、発表が近くなるに連れて生徒たちは徐々に輝き出す。そ

して1週間を切ると、車のギアが上がるかのようにその速度は増す。本番が間近に迫って来たときの生徒たちの集中力や公演に対する責任感は、普段の学園生活では見られないものだ。

公演までの練習も残すところ3回、こんな生徒たちの演劇公演(2月12日(日)りんゆうホールにて14:30~)を皆さんお楽しみに

85 舞台2 芳賀 慈 2006.02.10

時節柄体調を崩している生徒も少なくないのですが、「熱がある」「お腹が痛い」と言いながらも演劇関係生徒は休み返上で練習、プラスアンサンブル部生徒も連日夜まで練習しています。身辺が12日に向けて慌ただしくなっていく中で、私は数年前を思い出しています。

数か月に渡る練習期間中、必ず途中でやめる生徒がいて、気まぐれに入る生徒がいて、練習にこない生徒がいて、何度も話し合いをして、ようやく本番を迎えていました。当日になってすら現れない生徒もいる、信じられない「部員たち」でした。それでも、舞台を無事に務め上げたときの彼らのまぶしい表情が忘れられなくて、「やりたい」という生徒がいる限り実現できるようにしていました。暗い舞台袖で、小道具の最終チェックをしながらお客さんの入りも気にする、そんな当日でした。客席の一番後ろの真ん中にどーんと座ってゆっくりと舞台を楽しんでみたい、とひたすら思っていました。

その夢が、去年の学園祭で叶いました。演劇の担当は常勤のHさんに、また劇団員でもあるボランティアSさんの尽力もいただいて、私は全くのお客さんで観劇することができたのです。そこまで積み上げていく時間の共有はできなくても、本番での彼らの輝きはやっぱり感動的でした。

そして初めての、年度内2回目の公演が近づいています。こちらも中学生のオリジナル脚本によるものです。出演生徒以外の応援態勢もばっちりです。満を持して本番を迎えます。

86 多国籍人生相談 田房 絢子(高等部2年担任/英語担当) 2006.02.16

留学をすると、当たり前だけど世界中の人と友達になれる。特にアメリカみたいな多国籍な社会では、世界中から人が集まってくる。そんな彼らに人生相談したことがある。

アメリカの人たちは結構アツケラカンとした人が多くて、悩んでいる私に「それは大変ねえ。」と言いながら、そんなこと気にするなよというような姿勢である。ネパールの友達も、「心配する必要なんてないよ。アヤコは心配しすぎだよ。」と言ってくる。シンガポールやマレーシアの友達は、「そんなふうに考えてもだめだよ。それはこうでああで・・・。」といった感じ。ドイツの友達はしっかりと私を抱きしめ、「大丈夫よ。」と慰めてくれる。韓国の男友達は「かわいそうだね。大丈夫かい?」と悲痛そうな表情で親身になって心配してくれる。台湾や中国の友達は「いつまでもクヨクヨしてたらだめよ。はい、ごはん食べて!」と手料理を振る舞ってくれる。

そんなふうに色々な意見をもらったり、違った接し方をされると、「そっか、大丈夫かも。」という気になってくる。自分には大したことで、見ようによっては大した問題じゃないんだなって、なんだか冷静になれたものだ。そうすると解決策がサクッと浮かんだりする。個人の性格であってステレオタイプではないんだろうけど、これってその国独特な表現方法なのかなあなんて考えたものだ。非常に興味深い。

そして今、私は日本で生活している。毎日様々な人たちと出会う。世界でも日本でも同じだ。いろいろな考えや意見に触れることは、経験として人生を豊かにし、かけがえのない財産となっていく。10代の頃はマイナス思考で今とは別人のようだった。今の自分があるのは、前よりも自分が好きになれたのは、そういった経験があったからだ、確信をもって言える今日この頃である。

87 『担任(その1)』 杉野建史 2006.02.24

2005年度、私は1年生を担当している。男子女子が半々でバランスがよい。

学園の性格上、転入生や編入生を多く迎え入れる。今年度もたくさんの生徒を年度途中で迎え入れた。そこで難しいのが“学級経営”だ。生徒の様子を見て「どのような学級作りを行うか」をいろいろ考える。生徒の様子(在籍者が増えるので)がめまぐるしく変わった1年間だったので、練り上げた考えを少々変更し味付けなどを変える作業が必要になった。

私が学級作りの基盤にしているのは「落ち着いた学級」である。授業中、休み時間、放課後などどんな時でも生徒がそこ(物理的な学級の空間だったり、人間関係における空間だったり)にいらることができる学級でありたい。「当たり前だ!」とお思いになる方もいるかもしれないが、多くの高校は落ち着きがない(らしい)。知り合いの教師に聞いても「授業が成り立たない」ことが当たり前になっている高校も少ないとのことだ。

生徒が家庭(家族)以外で人間関係を構築する基本的なキャンパスが学級だと思う。その学級でお互いにいろいろな人間関係を体験して欲しい。「人と人との距離は常に一定ではない」ことを何よりも体験して欲しいのだ。今の子どもの多くはこの距離が一定でなくなったときに「人間関係がうまくいかない」と感じるようだ。特に距離が離れたときに「疎外感や仲間はずれ」を強く感じるらしい。お互いに本当の自分を表現しないままに作る人間関係ほどアンバランスなものはない。

自分を表現する怖さ。自分を表現しないことが当たり前になる異常さ。常に満足感を得られない生活。子どもが所属する(1日の多くの時間を生活する空間として)日常的基本的な学級でこれらのことを壊すために、学級経営はとても重要である。

88 いろいろな形の勉強がある 亀貝一義 2006.02.28

今年は、フリースクールの生徒たちが何人も高等部に進学したいといっている。フリースクールでの体験を土台にさらに自分を成長させたいという気持ちが表れていて、私たちもうれしい。その進学希望者の入試の面接を担当した。ほとんどの受験生が言っていたのは「自由が丘でのさまざまな体験ができたこと。例えば演劇とかブル部とか、あるいは強歩やキャンプなど」が非常に印象的といっていた。

私たちも、「勉強」とは決して机上の書物と教師の黒板とテストで終わるものではない、ということを知っている。今年の面接で、受験生たちはこのことを明確に教えてくれた。あの2月12日の「童話守」の演劇・音楽の共同公演は、非常に大きな思い出をつくり出したようである。自分の思いがけない体験は、さらなる飛躍への自信にもなるし、何よりもコミュニケーション能力の向上になる。

公演を体験して、舞台に立った生徒も裏方の生徒たちも「またやってみたい」といっている。新

しい年度が始まるが、また2006年度の自由が丘がみんなの前に表現される。私たちもまた期待や希望をもって臨んでいこうと考えている。

7月の強歩遠足は、札幌真駒内から支笏湖までの33キロ強を歩く。最初ほとんどの生徒たちは「歩けるわけがない」といっているのだが、スタッフも親も、いろいろな人が参加して共同の行動をしていくと「歩けた!」という達成感をもつことができる。

生徒たちには、さまざまなことがまず「食わず嫌い」であることもけっこうある。だから、まずスタッフと親が率先してやってみることが大切なのだろう。まず“まね”から始まりそうだ。「『学ぶ』とは『まねること』から始まる」とは有名な原則でもある。無理しても食べてみたらなかなかうまいという体験をどんどん積み上げるように工夫したい。新しいいろいろな形の勉強がある。

しかしやはり勉強の重要な部分は教科書的なものである。このことを軽視しては困るということも誰もが知っていること。

89 卒業式が終わって 亀貝一義 2006.03.06

高等部の第2回目(第2期)の卒業式を5日に実施した。卒業生は20人に満たないのであるが、多くの生徒があ的高校この高校からの転編入生である。卒業証書を渡しながら、私は「あの日」のことを思い出し、感無量の気持ちであった。式の間も終了後の父母との懇親会の時も、何度涙を抑えきれなかったことか。

ある母親が、入学時に「もう少しいい高校に入れるはずなのに」と嘆いたといっていたが、多くは同じだったかも知れない。「子どもが不憫」と思ったと正直にいう親もいた。しかし今日の卒業にあたって、親たちは「この高校に入れて本当に良かった」と言ってくれた。それは決してリップサービスではないはずだ。卒業生たちが、思い出の写真をつづったシーンをスクリーンで表現した。「一番小さな学校で一番大きな思い出をつくることができました」といっていたのも同じ感想であったろう。

いつも思う。それぞれに合った学校、それぞれに適した学校があるはずだと。ぜひ偏差値や規模や、その他普通いわれる尺度ではなく、いろいろと調べて高校を選んで欲しいと思う。

精勤賞を受けたA君は、小中学校の時不登校であった。Bさんは、ある高校からの転校生である。その高校の先生が「Bは学校に通うことすら難しいのです」といっていた。本学園に転校しようというときに「受け入れることは逆に彼女を困らせることとなりますよ」と忠告めいた話をしてくれた。しかしそのBさんもほとんど欠席なしに卒業した。その他ほとんどの生徒がこれに類する道をたどっている。

「この学校があったからうちの子は居場所と将来への進路を見つけることができたのです」などという挨拶を聞くと、やらなければならないことがまだまだある、と痛感する。

90 坊主頭 芳賀 慈 2006.03.09

坊主頭にしようかと思ったことがある。山田邦子の坊主頭は美しかったし、瀬戸内寂聴は仕事柄もあるけれど知的に似合っている。やってみようか迷っていたときスタッフのSぎのさんが坊主にしようと思っていると聞いた。「実は私もしたいと思ってるんですよ」「じゃ、一緒にしまし

ようか」「Sぎのさんがツルツル頭になるんなら」という会話が、今でも約束不履行のネタにされている。Sぎのさんはツルツル頭になった訳ではないので、約束不履行ではないのです！

数年前、また坊主頭願望の波がやってきたが、今度は家人に止められた。確かに誰がどう見ても「どうしたんですか」「何があったんですか」と思うだろうし、訊かれないまでも大病を患っていると心配されるかもしれない。それらを押しつけるほどの勇気も決意もなく、今度も簡単にあきらめた。

と、この1年は白髪が大発生し、気づくたびに抜いていたら髪が薄くなってきた。若白髪は出世するんだと、生徒には意味不明の主張を力なく繰り返している。ヘアカラーと白髪染めは使う薬液が違うらしい。このままにしておくとのくらいマープルになるのか、もっとマメに染めるべきか、坊主だと白髪は目立たないのか、思いは果てしなく広がっている。